



「恋人がサンタクロース」

クリスマスが近づくとなぜか心がうきうきする。我が家でも10年近く続いた儀式があった。娘が物心ついた3歳からの・・・。

窓にへばりつき、夜空の星を見上げながら、「お星様、お星様、ゆうちゃんのお願いを聞いてください。・・・がほしいです。」と、毎日、手を組んでお祈りをするのである。それを、カーテン越しにパパサンタクロースが耳をそばだてて聞き、クリスマスの朝、でっかい靴下の中に用意するのであった。

「玄関の鍵がかかっているのに、サンタさんどこから入るの？」

「それはね。2階の窓だよ。」

「そう言えば、〇〇ちゃんがサンタさんはパパとママだよ。だって」

「それはかわいそうだね。サンタさんを信じない子には、プレゼントは来ないよ。」

とか・・・。

いろいろな苦悩を乗り越えて、私の娘は小学校5年生まで「サンタクロース」を信じていた。（現在は、このほほえましい儀式はなくなりちょっぴりさみしい）

しかしながら、「サンタ」を信じなくなったときの答えは、すでに用意していた。それは・・・。

「サンタはいるよ。ゆうきのサンタはパパとママだ。大きくなって彼氏ができたら自分がサンタになる番だよ。そして、結婚して子どもが生まれたら、ママとしてサンタになるのだ。」と。

ユーミンが、「恋人がサンタクロース」で唄っている。

“むかし隣のおしゃれなお姉さんが クリスマスの日 私に言った

「今夜、8時になれば サンタが家（うち）にやってくる」

「違うよ それは絵本だけのお話」 そういう私にウィンクして

「でもね、大人になれば あなたもわかる そのうちに」

恋人がサンタクロース・・・ “

世の中、絆が一番深いのは家族である。「朝起きて、ご飯食べて、学校に来て・・・帰って、ご飯食べて、寝て」と、ごく当たり前のことだけど、これは、全て、皆さんを育ててくれている親のおかげなのである。皆さんがこの世に誕生し10数年間、一日も休まずに行っているこの出来事は実はありがたい。本当に幸せなことである。

サンタは絶対にいる。頑張っている人たちのために、感動という素敵なプレゼントを届けようとしている。春よこい。は～やくこい。熊野東中学校三年生に！頑張ろう。

良いお年を。

